

第7章 総括

第1節 各種調査の検討から推定される姉小路氏城館跡の変遷

1 発掘調査成果から推定される暦年代

これまで、文献史料調査、測量調査、歴史地理調査、発掘調査の成果を報告してきた。本節では、それらの調査成果をまとめ、姉小路氏城館跡と当遺跡が所在する古川盆地全体の変遷を考えたい。まず、発掘調査で出土した遺物から姉小路氏城館Ⅰ～Ⅴ期の暦年代を検討する。

姉小路氏城館Ⅰ～Ⅴ期は、各山城の遺構面と遺構面を構築する造成土の出土遺物を根拠に、変遷を統合して導いたものである。第5章第8節で示した通り、出土遺物では土師器の出土点数が最も多く、土師器の各分類が各層位で割合が変化していくことが明らかになっている。また、古瀬戸後Ⅳ期（新）～大窯第4段階までの瀬戸美濃焼が各層位で変遷することが明らかとなった。このため、姉小路氏城館跡を含む姉小路氏関連遺跡においては、土師器の各類の変遷が瀬戸美濃焼の変遷と一致することに着目し、編年を検討してきた（三好清超 2021）。しかし現状として、飛騨地域では、歴史的事象と遺物の変遷とを総合した暦年代は明らかになっていない。したがって、瀬戸美濃焼の年代から暦年代を推定する。

全国の城館跡では、藤澤良祐による瀬戸美濃焼の生産地の編年を基準に考える場合が多い（藤澤良祐 2008 など）。一方、美濃地域では土器・陶磁器の消費地として暦年代の検討が進んでいる。井川祥子は、守護所や戦国城下町などより出土する各分類の土師器の比率の変化を示し、文献史料から導かれる各遺跡の存続期間を前提に、変遷と暦年代を提示した（井川祥子 2006）。また、内堀信雄は、井川による土師器の編年と藤澤による瀬戸美濃焼の編年に基づき、土師器・瀬戸美濃焼の各分類の変遷を示し、守護所や戦国城下町等の動向にふれつつ暦年代を整理した（内堀信雄 2021b）。この美濃地域の在り方は、姉小路氏城館跡で土師器の分類ごとの割合が土層ごとに変遷していく傾向と近似する。このため、姉小路氏城館跡では美濃地域を参考に、遺跡の暦年代を考える。

前述の井川・内堀らの検討で示された美濃地域の変遷によると、1期は古瀬戸後Ⅲ期から後Ⅳ期（古）段階の時期であり、15世紀前葉から中葉に位置付けている。2期は古瀬戸後Ⅳ期（古）から後Ⅳ期（新）であり、15世紀後葉から16世紀初頭に位置付けている。3期は古瀬戸後Ⅳ期（新）から大窯第1段階であり、15世紀末から16世紀前葉に位置付けている。4期は大窯第1～3段階であり、16世紀中葉に位置付けている。5期は大窯第2～4段階であり、16世紀後葉から17世紀初頭に位置付けている。

この美濃地域の知見を姉小路氏城館跡に援用する。姉小路氏城館Ⅰ期は始期の時期は不明であるが終期は15世紀後葉まで、姉小路氏城館Ⅱ期は古瀬戸後Ⅳ期（新）～大窯第1段階であり15世紀末～16世紀前葉、姉小路氏城館Ⅲ期は大窯第1～2段階であり16世紀前葉～中葉、姉小路氏城館Ⅳ期は大窯第2～3段階であり16世紀中葉～後葉、姉小路氏城館Ⅴ期は大窯第3～4段階であり16世紀末～17世紀初頭と位置付けられる。

2 各種調査から推定される姉小路氏城館跡の変遷

前項で述べた暦年代を基に、文献史料調査・測量調査・歴史地理調査の成果を総合して姉小路氏城館跡の変遷を示したい（第85・86表）。なお、郷名は近世の郷名を用いて記述する。

姉小路氏城館Ⅰ期 15世紀後葉までの時期である。

14世紀代に飛驒国司として姉小路氏が入国し、岡前館を居館としていた可能性がある。15世紀に入り、姉小路氏が、古川郷を拠点とする古川氏、小島郷を拠点とする小島氏、小鷹利郷を拠点とする向氏と、3家に分かれる。15世紀後葉には、各家での争いが記録に残る。このように3家に分家してから、盆地内部での争いが表面化するまでの時期である。

古川郷では古川城、小鷹利郷では小鷹利城の利用が始まる。この時期の古川城の全体像は不明である。対岸の宮川右岸では、上町一帯の弥生時代からの遺跡地に中世集落が存続し、是重では中世荘園の存在が確認できる。小鷹利城でも遺構確認は断片的であり、全体像は不明である。小島郷では岡前館が既存集落の一角に形成された。

各郷では、中世集落が古代からの集落遺跡と重なって分布し、その周辺では天台宗の寺院勢力が想定される段階である。各山城の山麓には、寺院勢力をも取り込む集落に拠点となるような区画があるものの、岡前館跡以外に居館というべき遺跡を認めることができない。

姉小路氏城館Ⅱ期 15世紀末から16世紀前葉の時期である。

古川氏は、1499年に在国を開始する。1521年頃までに三木氏が高山盆地に進出した。1531年に古川城は落城したとの記録がある。小島氏と向氏は、前時期から引き続き在国していたと考えられる。徐々に古川盆地に三木氏の勢力が伸張し始め、各家の争いが増える時期である。

古川郷の古川城では、最高所の平坦地がこの時期に造成されているため、曲輪や切岸など地表面で観察できる多くの城郭遺構が構築されたと考えられる。対岸の宮川右岸では、平地部の中世荘園と宮川沿いの街道周辺に集落が想定される。

小島郷では、小島城が築城された。最高所の櫓台、最も広い曲輪の主郭など、現在地表面で観察できる城郭遺構はこの時期に造られたと考えられる。周辺では、北麓に谷川を基軸として武家拠点・寺・集落が集まる拠点地域が展開し、その周囲に神社が配置される。また、岡前館周辺から小島城にかけて、宮谷寺を中心とする密教系の勢力が展開したとみられる。岡前館は、この頃に使用を終えた。

小鷹利郷では、小鷹利城で主郭にL字状の礎石建物が構築された。主郭やそこを取り囲む切岸など、現在地表面で観察できる大きな城郭遺構は、この時期に構築されたと考えられる。周辺では、東麓に小規模な武家拠点が想定される。また、少し離れた後の向小島城の北西麓にあたる信包の殿野周辺を起点に集落が展開し、その北側の山頂に城見寺と伝わる密教系の山寺の存在が想定される。

姉小路氏城館Ⅲ期 16世紀前葉から中葉の時期である。

1554年には姉小路氏3家が叙任を受けており、健在であったと考えられる。一方、1556年には姉小路氏3家の拠点が落城しそうだと伝えられ、向氏はこれ以降史料にあらわれない。また、1560年には三木良頼が古川氏の名跡を継ぎ、1563年には古川氏と小島氏は健在であった記録が残るものの、それを最後に古川氏も史料にあらわれなくなる。このように、三木氏の勢力が盆地に及び、古川氏と向氏が衰退していく様子が看取される時期から、三木氏が古川盆地を完全に掌握するまでの時期である。

古川郷において、古川城ではⅡ期の様相が継続していたものと推測される。

小島郷では、小島城は、Ⅱ期の様相が継続していたと考えられる。野口城が新たに築城される。最

も広い主郭、一段高い櫓台、長大な切岸など現在観察できる大きな城郭遺構は、この時期に設けられたと考えられる。周辺環境として、野口城では北・南麓に既存集落が存在する。小島城では、北麓の集落が「小島町」として西側に広がりを見せた様相が想定できる。また、野口城の南側、小島城の西・北側では宮谷寺を中心とした密教勢力が衰えていき、真宗勢力への伸張が顕著となる。

小鷹利郷では、小鷹利城で遺物が見られなくなる。集落は、前時期から位置が変わることなく存続していた様相と考えられる。

姉小路氏城館Ⅳ期 16世紀中葉から後葉の時期である。

古川氏と小鷹利（向）氏の記録が見えなくなり、三木氏の勢力が古川盆地へ浸透したと考えられる。小島氏は存続していた。三木氏の勢力が完全に古川盆地を掌握してから、金森氏の侵攻により滅びるまでの時期である。

古川郷では、古川城で土留め石垣による虎口と、主郭櫓台の礎石建物を構築した時期である。この時期に、現在地表面で観察できる形状に改修されたと考えられる。文献史料に「下ダン」に居住していた人物名が見えることから、山麓部に武家屋敷・寺社等の使用が想定される。対岸に宮川右岸の集落が引き続き継続している。

小島郷・小鷹利郷の、小島城・野口城・小鷹利城・向小島城において、盆地外へ向けた遺構配置が顕著となる。小島城では神原峠方面に堀切・堅堀、野口城では数河峠方面に大規模な堀切と畝状堅堀群、小鷹利城では白川郷方面に畝状堅堀群や堀切を配置する改修が行われた。また、向小島城が新たに築城され、ここでも白川郷方面に畝状堅堀群を設けている。それぞれの山城周辺は、Ⅲ期の様相が継続しているものと推測される。

このように、三木氏の勢力が、古川城で山上の礎石建物、山麓の武家屋敷・寺社等を整備し、盆地北側の小島城・野口城・小鷹利城・向小島城で、群として軍事的な機能を果たすよう強化した状況が想定される。

なお、1585年の金森氏侵攻以後、野口城・小鷹利城・向小島城の3城は、使用されなくなった。

姉小路氏城館Ⅴ期 16世紀末から17世紀初頭の時期である。

1585年に金森氏が飛騨に侵攻し、三木氏が滅亡した。金森氏が統治してすぐ、1585～86年にかけて一揆が勃発している。1589年に金森可重が増島城下の商町に禁制を出しており、この時までには増島城の築造が始まっていたと考えられる。このように、金森氏が侵攻してから、拠点となる増島城を整備するまでの時期である。

古川城では、大きな石材を用いた虎口、主郭と櫓台の礎石建物により改修された。町場は増島城下に移っており、宮川右岸の集落は村落として存続したものと考えられる。

小島城では、主郭に礎石建物が建てられたと考えられる。主郭南側斜面には2 m高さの石垣3段を構築した。また、虎口でも算木積み志向する大きな石材を用いた石垣が認められる。周辺要素では、西・南麓に計画的に町場を設定した状況が看取される。増島城と小島城の町場では、4点が共通する。それは、河川・街道の結節点に位置すること、城郭—武家地—町人地—河川という配置関係、町場に寺社を取り込む在り方、街道を取り込んで三街区を設定する町場の在り方である。

なお、当該時期で、古川城と小島城は使用されなくなった。

第85表 姉小路氏城館跡変遷表(1)

年代	時期		歴史的事象 (文献史料調査)	古川郷		小島郷		
				古川城跡		小島城跡		
				試掘確認	遺構配置	試掘確認	遺構配置	
14世紀	I	～15後	・1371年、飛驒国司の軍勢、越中に出兵 ・1378年、「飛驒国司」藤原家綱が叙任	古川1期 土坑 遺物を伴わない 上層から古代の須恵器等が出土している	不明			
15世紀			【姉小路三家鼎立】 ・～1405年、姉小路氏三家に分家 ・1411年、応永飛驒の乱。古川尹綱が討伐される 【盆地内部の争い】 ・1468年、向氏と小島氏で相論あり ・1471年、古川氏と守護の軍勢が争い、三木某が討死 ・1479～80年、古川氏と小島氏が争う					
		II	15末～16前後 IV新-大1 土師器皿3・4					【守護勢力や古川家の衰退と三木氏の勢力伸長】 ・1499年、在京していた古川家当主が在国を開始 ・～1521年、三木氏が高山盆地に進出
		III	16前～中大窯1-2 土師器皿4・5	・1531年、古川城が落城し、古川家当主が広瀬郷へ退去 ・1554年、姉小路氏三家叙任 ・1556年、姉小路三家の拠点が落城しそうだと風聞あり ・1560年、三木良頼が古川家の名跡を継ぐ ・1563年、古川氏・小島氏の人物健在				
16世紀		IV	16中～後 大窯2-3 土師器皿6・7	・1575年、古川城山麓部使用（「下ダン」） ・1582年、八日町の戦い。小島時光が三木方で参戦。	古川3期 虎口・土留め石垣 主郭櫓台・礎石建物	大きな遺構配置は変わっていない	小島1期 地山上層から掘り込む土坑	高い櫓台など形状に大きな変化はない。
		V	16末～17初 大窯3-4	【金森氏の侵攻と統治】 ・1585年、金森氏が侵攻し、三木氏滅亡。 ・1585～86年、飛驒国内で一揆が勃発。古川盆地でも戦いがあり、金森氏妻子が「当城」に籠る。 【増島城下の建設】 ・～1589年、金森可重、増島城下の商町に禁制を下す（この時まで増島城の建設を開始）。 ・1600年、金森氏、関ヶ原の合戦に際して東軍に参戦。	古川4期 虎口には巨石を用いた石垣 主郭には礎石建物があつたものと想定	大きな遺構配置は変わっていない 虎口の石垣が地表面で観察 主郭・虎口など主要部のみ改修した可能性	小島2期 残りが悪いが礎石が残存する 主郭の南側切岸に高さ2m程の石垣が3段 虎口に算木積みを目指した石垣	主郭南側石垣
17世紀			【増島城の廃城】 ・1615年、一国一城令。程なくして国内の支城群が廃城。増島城は旅館となる。					

第 86 表 姉小路氏城館跡変遷表 (2)

小島郷		小鷹利郷				空間構造の変遷 (歴史地理調査)
野口城跡		小鷹利城跡		向小島城跡		
試掘確認	遺構配置	試掘確認	遺構配置	試掘確認	遺構配置	
		小鷹利 1 期 柱穴 遺物を伴わない				【古代以来の地域構造が継承される】 ・古代以前の遺跡地に立地する中世集落 ・古代寺院跡（古川郷・小島郷） ・中世荘園・是重の存在 【岡前館】 ・山際の段丘上に形成された街道と集落 ・既存集落の一角に形成 ・周辺部に想定される天台宗勢力 【姉小路三家の拠点】 ①小島郷（小島氏） ・小島城、次いで野口城の利用開始 ・小島城北麓の谷川を基軸とする拠点地域（武家拠点・寺社・集落） ・16 世紀前半期創建の真宗寺院と「小島町」 ・野口城周辺に存在した既存集落 ②小鷹利郷（向氏） ・小鷹利城利用開始、礎石建物有 ・「殿野」周辺を起点とする集落の展開 ・山寺（伝 城見寺）の存在 ・小鷹利城東麓の小規模な武家拠点の存在を想定 ③古川郷（古川氏） ・平野部の中世荘園・是重と宮川沿いの街道を基軸とする集落のあり方 ・古川城の利用開始か → <u>三家ごとのヴァリエーション</u> 【宗教勢力】 ・宮谷寺を中心とする密教勢力の展開（～15c） ・真宗勢力の伸長（16c 前半～）
野口 1 期 主郭に掘立柱建物 土塁 土師器皿が大量に出土	高い檜台など 形状は大きく 変わらない	小鷹利 2 期 L 字形の礎石建物	一段高い主郭、曲輪や切岸などを造成			
野口 2 期 主郭に掘立柱建物 土塁 畝状堅堀群	盆地外に向けた遺構配置 畝状堅堀群、巨大な堀切など		盆地外に向けた遺構配置 畝状堅堀群等を造成	向小島 1 期 主郭に掘立柱建物 土留め石垣	盆地外に向けた遺構配置 畝状堅堀群等を造成	【山城の軍事的機能強化（小島・野口・向小島・小鷹利）】 ・盆地外部を意識した防御遺構の配置 ・既存集落のあり方を引き継いだ拠点地域 ・小島氏は存続（「小島町」形成か） 【古川城周辺の発展的様相】 ・山上部の使用、礎石建物有 ・山麓部周辺の整備の可能性 （武家屋敷・寺社等の可能性） ・対岸街道沿いの「古町」 → <u>高山盆地、益田郡を継続的に本拠とする三木氏勢力のあり方</u>
						【金森氏による都市整備】 高山城と城下町を指標とする 計画的町場の設定（小島→増島） ・河川、街道の結節点に位置 ・城郭－武家地－町人地－河川という配置関係 ・真宗寺院を中心とする町場 ・町場のあり方（街道の取り込み、3 街区） ・主要部を改修して使用したと想定される前勢力の山城（小島・古川） ⇔再利用されなかったと想定される山城（野口・向小島・小鷹利） → <u>増島城下に至る初期の過渡的様相</u> 【増島城廃城に伴う地域構造の変化】 （増島）城郭、武家地の耕地化。在郷町として確立。 （5 城の地域）村落としてのあり方が引き継がれる。